

「おとふけ」の 伝承

私たちのふるさと「おとふけ」。先人たちの労苦があり、いま、私たちの住む「おとふけ」がある。広報おとふけでは、音更町に根をおろし、ふるさとを築いてきた人たちの後世に語り継ぎたいお話しを紹介しています。



土田 定利さん
昭和9年11月10日生まれ。
豊田在住

私の生い立ちと 幼少時代

私

は昭和9年11月10日に豊田地区の現在地で生まれました。3歳の時に父が結核のため32歳で死去。父の記憶は残っていないが、スケールの大きな人だったと聞かされてきました。

私が子どもの頃は結核が流行し、5年の間に父をはじめ7人の家族が病で亡くなりました。にぎやかな大家族のはずが、寂しく悲しい我が家の暗黒時代でした。土田家は曾祖父が明治40年に山形県から入植し、払い下げ申請した原野を開墾した畑が自分の土地になりました。この土地に定住して百数年になります。

戦時中の小学校時代

小

学校時代は戦争のまっただ中、次々に地域から出征する兵士を見送りしました。また、当時の弁当といえば、いなぎびに豆と麦のご飯が主食でした。3年生以上は援農に出かける。農家の畑ではだして芋を掘り、昼にはかぼちゃの塩煮をこちそうになつて帰る日々でした。

十勝農学校へ進学

そ

の後、先生の勧めもあつて十勝農学校（現帯広農業高校）に進学。中士幌駅まで7キロの砂利道を夏は自転車を通いました。

当時、母はほとんど一人で農業を続けながら、朝4時40分には家を出る私のために弁当まで用意してくれました。睡眠不足は常のこと、大変な苦労だったと思います。

大冷害とカラマツ

就

農して間もない昭和29年と31年は、大変な冷害の年でした。収穫物がほとんどなく、祖父が植えていた

30年生のカラマツを切り出して、その代金で食べつないだ記憶があります。

つらい大冷害の歴史の積み重ねが、湿地帯だった豊田地区の基盤整備を進めさせ、地名通りの「豊かな農地」に変わっていききました。

森林組合の組合長その他、早くから妻子に負担をかけることになりましたが、植えた50ヘクタールのカラマツ林は間もなく伐期を迎えます。時代の変化と共にその需要も大きく変わってしまいました。



80歳を過ぎて 思うこと

こ

の年になってもう大したこともできないですが、我が家に残る古い資料や写真の類い、母から聞いてい

土田家の歴史を綴った「土田の家の小さな歴史」



た父のことなど、土田家の歴史をまとめて平成24年に「土田の家の小さな歴史」という小冊子を作りました。20数人のいとこと私の子や孫たちから予想以上の反響がありました。

私が子どもの頃に見た農業。土地改良を行い、畜耕からトラクターに移行した自分たちがやってきた農業。高度な完成した機械類を駆使する現在の農業。大きな変化がありました。

冷害を知らない孫たちの世代には、過去にはこんな苦しい中で農業があり、発展の歴史があることを知ってほしい。いざという時のためにたくましさを身につけてほしいと願っています。